

第3学年3組 道徳科学習指導案

日時 令和元年7月4日(木)

指導者 水田 雄治

1 本授業の主張点

教材文を聞いて話合いたい所(道徳的問題場面)を見つけ、そこから自分事に関わるテーマ(道徳的課題)結びつけようとする児童の姿をお見せします。また、「考え、議論」している姿も併せてごらんください。

2 主題名 正しいことは 勇気をもって【内容項目 A-(1) 善悪の判断, 自立, 自由と責任】

3 教材名 「あと、ひと言」(みんなのどうとく 3年 学研)

4 ねらい

主人公にたりなかったことやこれからの自分を考えることで、善悪の判断をし、正しいと思ったことは勇気をもって行うことができるような道徳的実践意欲や態度を育てる。

5 本時の授業展開

過程	学習活動	○主な発問	・指導上の留意点
導入	1 「善悪の判断」や「勇気」について考える。(7分)	○ 善悪の判断をする時は何が必要ですか。 ○ 勇気を出して言うことの難しさとは何ですか。	1-(1) 「善悪の判断」をする時には「勇気」が必要であることを確認させることで、ねらいとする価値への意識づけを図る。 1-(2) 正しいことを言っているのに、嫌な思いをした時、勇気を出して言えなかった時のことを想起させ、勇気に係る人間理解を促す。
展開	2 教材「あと、ひと言」を読んで話し合う。(25分) (1) 教材文を読んで道徳的問題場面を見つける。 (2) 道徳的問題場面から道徳的課題を考えさせる。	○ 教材文を読んで友だちと話し合いたい所はどこですか。	2-(1) 教材文から道徳的問題場面を考えさせ、みんなと話し合いたい所を発表するよう促す。 2-(2) 出てきた道徳的問題場面から教師が価値の整理をし、明確にすることで、道徳的課題を考える場を設定する。 道徳的課題を見出すための手立て ・教師の補助発問・事前のアンケート結果から
	どうすれば勇気を出して注意ができるのか考えよう。		
終末	(3) 主人公が悩んでいる場面。	○ ぼくは何が足りなかったのでしょうか。	2-(3) 主人公の置かれている状況を押さえ、ぼくが足りなかったことを考える。
	(4) 自分だったらどうするか考える	○ もしあなたがぼくだったら、どうしますか。言う 言わない	2-(4) 自分事で捉えさせるために、自分が「ぼく」の立場だったら、やめるよう言えるのか言えないのかに分かれて話し合いを行う。行為だけでなく、そう考えた理由も併せて話し合うことで、「善悪の判断」や「勇気」、「人間の弱さ」について多面的・多角的な視点をもたせる。
	3 「善悪の判断」や「勇気」に必要なことを考える。(10分)	○ これからあなたは どうすれば勇気を出して注意できると思いますか。	3 言った場合と言わなかった場合のこれからについて考えることで、勇気を出して伝えることはこれからのよりよい友達関係にいくことについて捉えさせる。さらに、今回の道徳的課題に対して、自分事としてのまとめを考えさせる。
	4 「こんな人になりたい」について考え、記入する(3分)	○ 今日の授業を受けてどんな人になりたいと思いましたか。	4 「こんな人になりたい」について、今後このようにできたらいいなという思いを書かせ、発表させることで、ねらいとする価値への意欲づけを図る。

1 はじめに

本教材「あと、ひと言」は内容項目A-(1)「善悪の判断」について学習するものである。2018年度の研究発表会でも同一内容項目である「言い出せなくて」の授業を行った。その際、違和感を覚えたのが、前指導要領解説には善悪の判断の所に「勇気」が入っていたが、現行の指導要領解説には内容項目A-(5)希望と勇気、努力と強い意志の部分に「勇気」が入っている所である。このA-(5)の教科書の使われ方は主に、スポーツ選手や有名人などの生い立ち等が書かれているものから学習するものである(例 6年 羽生結弦 3年上野由岐子)。この場合における「勇気」とは、有名人から「努力することの素晴らしさ」「諦めずに何回立ち上がる大切さ」など、心を奮い立てるようなニュアンスがある。善悪の判断には「勇気」が必要な側面があると考え、主題名やねらいにも「勇気」という言葉も併せて使用した。本授業も善悪の判断をすることと、勇気を出すことについて考えることができるようにしたいと授業を仕組んだ。

2 本時における主体的な学びの姿とは

道徳部の研究の一つとして、道徳的問題場面から道徳的課題を見いだすという流れがある。①道徳的価値の大切さと人間的な弱さ(人間理解)を導入で考える。②教材文を読んで道徳的問題場面(教材文内の気になる所、話合いたい所)をみんなで話合う。①と②、アンケート結果、補助発問等で③道徳的課題(自分事としての本授業のテーマ)をみんなで意見を出し合い決定する。自分たちで決めるテーマであるので児童は主体的に展開前段、後段を考え、発表につなげることができる(図1)。



図1 主体的に授業に取り組もうとする姿

3 本時における対話的な学びの姿とは

従来の道徳では、登場人物の心情を中心に考えるため、どうしても受け身な授業となり、教師対児童のやりとりが主であった。また、心情のみでは考える幅が狭まり、きまりきったことをきまっている児童が発表するに留まっていた。本授業の対話的な学びとは自分の意見を友達に聞いてもらいたいという思いと、友達の意見を聞いて、自分の意見を比べたいという双方向の思いが不可欠である。話合いの手立て



図2 話合いの様子

として、二項対立(言う、言わない)などの条件のもと、なぜそれを選んだのかという理由を自分の考えとし、発表する(図2)。注意点としては、討論ではなく、議論であるため、自分の立場と違う友達に対して批判的になるのではなく、そのような考えもあるのだという姿勢で聞くように促すことである。友達の意見を聞き、更に自分の考えを再構築することで自ずと「考え、議論する」姿が期待される。

4 本時における深い学びの姿とは

本時の深い学びとは、道徳的問題場面から道徳的課題を見だし、みんなと「考え、議論する」ことを通して、これからの生き方(こんな人になりたい)に記述したり、発表したりすることで、道徳的実践意欲や態度を養うことである。授業前でも「こんな人になりたい」は書けるのではないかと指摘を受けた。もちろん容易に書くことができる児童もいるであろう。本授業では、道徳的価値の大切さはわかるけれども、そこに



図3 「こんな人になりたい」に記入する児童

は人間の弱さが阻害し、うまくいかないことを知る。そんな中でもそれに打ち克とうとする教材の主人公の思い、友達との話合いを通して多くの考えを知る。これらを通した上で「こんな人になりたい」は建前だけで上滑りすることはなく、難しさはあるけれど少しでもよりよい生き方を目指したいという本音の部分が見ることができるのではないかと期待している。ただし、この深い学びに行き着くためには、教材研究、発問の吟味が不可欠である。今後も授業を見ていただき授業力向上につなげていきたい。